

# L'Echange

La Société Franco-Japonaise des Techniques Industrielles 日仏工業技術会

L'Echange は、特に次世代を担う若い技術者・関係者に向け、日仏工業技術の

FREEPAPER 第5号 2017年3月発行

交流・普及を促進することを目的としたフリーペーパーです。

巻頭特集 ● 西洋建築史・土居義岳教授  
文化 ● ホルドーの広場  
生活 ● グルノーブルでの留学生活  
都市 ● パリの新型トラム  
食 ● 布団のかたち

Special

Culture

Vie

Urban

Cuisine

L' Echange

巻頭  
特集

第 5 号

## 西洋建築史・土居義岳教授 Urbaniste Yoshitake DOI

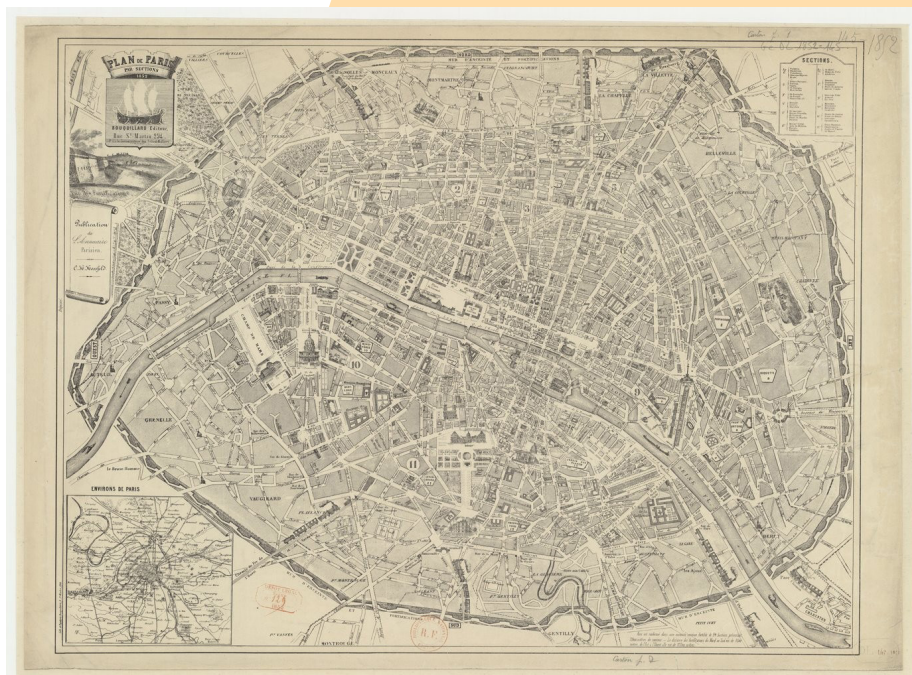
都市と建築

**都市と建築の問題について、批判的研究の視座から一貫して取り組まれている九州大学芸術工学研究院 西洋建築史家・土居義岳教授。今回の巻頭特集では、土居先生に都市と建築をめぐる概念から今後の構想に至るまでを伺いました。**

昨今、建築学会の方でも学問批判を考えているようです。出発点として、自分がかかわる学問を批判的に再検討し、そこから出発することはとても重要です。建築関連では建築史学会、建築学会、都市計画学会などがあり、どうしてもセク特的になりますが、意識はシームレスであるべきです。ぼくが訳した『パリ都市計画の歴史』の著者ピエール・ラヴダンが、都市史が専門ということになりますが、やはり広い意味の都市学すなわち urbanisme にかかわっている。



西洋建築史・土居義岳教授



オスマン県知事によりパリ大改造が始まる第二帝政期 1852 年のパリの地図  
(gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France)

20 世紀初頭にいわゆる先進国で、国際協調で足並みをそろえて都市計画法に基づく都市計画をはじめた。100 年の歴史があります。その都市計画の訳語として、city planning とするとやはりアングロサクソンの考え方だという気がします。フランスの Urbanisme とすると、計画も含まれますが、やはり分析も含む都市学です。フランスは、都市計画法による都市計画をはじめると同時に、都市学のための Institut d'Urbanisme de Paris（パリ都市研究所）を設置しました。そこに留学する日本人学生もいるわけです。

そういう意味で、パリでは、ここ 100 年ほどのあいだに、3 種類の悉皆的調査がなされています。ぼくは、それらを「都市スキャン」とよんでみたい。まず 20 世紀初頭、衛生学的な調査が行われました。不衛生住宅、不衛生街区ブロックという指標が考えられ、それがどうパリに分布しているかが調査されました。戦後、高度経済成長期には、空間利用についての調査がありました。それにもとづいてパリをニューヨークのような高層建築の都市にしようという人びとが出現し、イタリア地区やフロン＝ド＝セーヌ地区などを建設した。そののち建築史家フランソワ・ロワイエが、建築類型学、様式、景観、都市組織などの観点からパリを調査した。それが 1977 年からの保全型の都市計画をもたらしたのです。パリではこのような都市スキャンから政策が策定されているようです。ある指標におうじて、都市は姿をあらわすものようです。

またパリを手本にして、わたしたちの都市をどうかんがえるべきでしょうか。日本の都市計画の専門家たちは、日本の近代都市には「都市建築」という、都市の有機的なパーツとしての建築類型という概念が希薄だと指摘しているようです。つまり都市と建築が、故意に切断されて、近代都市が建設された。ところが日本では 1919 年に（旧）都市計画法が制定されましたが、それはヨーロッパとほぼ同時代だったのです。それでもなぜ、いわゆる都市建築が確立されなかったのか、都市と建築は切断されているのか？これは重大な日本的課題なので、若い研究者にもぜひ検討していただきたいことです。

### —若い時の過ごし方について

若い時は、食欲にしゃにむに頑張るものようです。そうすれば 30 歳になるころ、どこかの港に入っているだろう、とル・コルビュジェもいついたようです。ぼくの 20 歳代は、シ



ジャン・マルキ撮影によるベルヴィル地区の第11不衛生街区(1958)。右側の近代的建物と左側の荒廃し老朽化した地区の対比が見られる。  
(gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France)

ニカルな大志、自信過剰な自暴自棄、自虐的な自惚れ、といった矛盾のかたまりでした。どうも過激な先輩たちの影響であったようです。ウインドウズ以前の時代でしたので、語る資格もないと思いますが。

### — 批判的研究について

学生のころ、建築学科か都市工学科かで、迷いました。ガイダンスをきくと建築は楽しそう、都市工学科はつらそうでした。だから建築学科に進みました。世の中の役に立とうと、建築計画学を学ぼうとしました。ところが学問的コアが曖昧なような気がしました。そこで比較的方法論が明確な建築史学を学ぼうと思いました。就職困難を知りつつ、あえてやる、という感じでした。

ぼくは建築史をととして批判的建築論を展開してきたようですが、当時の建築史学も自己批判していたことを、そのまま踏襲していたのです。1970年代、村松貞次郎先生は「虚構の崩壊」を語っていた。堀口捨己が再評価された。浜口隆一による日本近代の固有性の指摘も、生きていた。ただ日本の後進性もわかりましたので、いちど典型的に保守的なものを知っておこうと思い、フランスの古典主義を分析しようとおもった。先輩の三宅理一さんも近いところをテーマとしていたので、棲み分けには気がつかれました。

修士論文ではやはり批判的観点から「学としての建築」をテーマに、アカデミズムを研究しました。博士課程では、自宅で孤独に勉強するのはよくないので、早く留学したいと思っていました。さいわい1983年からブルシエ(フランス政府給付留学生)として4年間、パリ＝ラ＝ヴィレット建築学校とパリ＝ソルボンヌ大学で学びました。クロード・ミニョ(Claude Mignot)にみてもらいました。

ところが1980年代の批判的な雰囲気、モニュメントではなく都市だ、ヨーロッパではなく



アジアだという全般の指向のなかで、西洋の正統派を研究するぼくは、かなり異端で、ニッチで少数派でした。批判的に西洋建築史をやっていたのですが、ベタだと思われていたんですね。博論はオーバードクターでやっと書けました。

都市と建築がシームレスなパリのビュット・オ・カイユ地区  
(聞き手撮影)

### — 今後について

1980年代、つまりぼくがフランスに留学していたころに生まれた、若い人びとが大学の同僚になりつつあります。この世代は発想が自由でしなやかで、期待しています。ぼく自身はもう歳なので、大規模調査などによらない、紙と鉛筆による研究というスタイルにすでに軟着陸している気持ちです。ただ妄想、飛躍といった観念力をここで発揮したい。たとえば『言葉と建築』『時間と建築』を書いたし、この3月には『知覚と建築』を出版します。ぼくは建築とそうでないものをクロスさせるという方法論でやってきました。先輩たちから教えてもらった批判的精神の、ぼくなり成果かもしれない。この路線で、さらに10年以上かけて、あと二冊ほど構想してみる。それ以外にも「20世紀全体をどう捉えるか?」「歴史からの脱出」など面白い。まだまだ知られていない西洋の個別研究テーマとその成果を紹介する。などなど味わえることは多そうです。

けっきょく「建築とはなにか?」という本質論に戻るだけのことのようです。そういえば若い頃はそれが大問題だったなあ、などと回想しています。大学を退職したあとが楽しみです。毎月、各種学会の大会に参加して、最前線の研究を拝聴して刺激をいただく。好きな本を読んで妄想全開。たのしい隠居生活でしょうね。

(聞き手：江口久美)

L'ECHANGE

文化

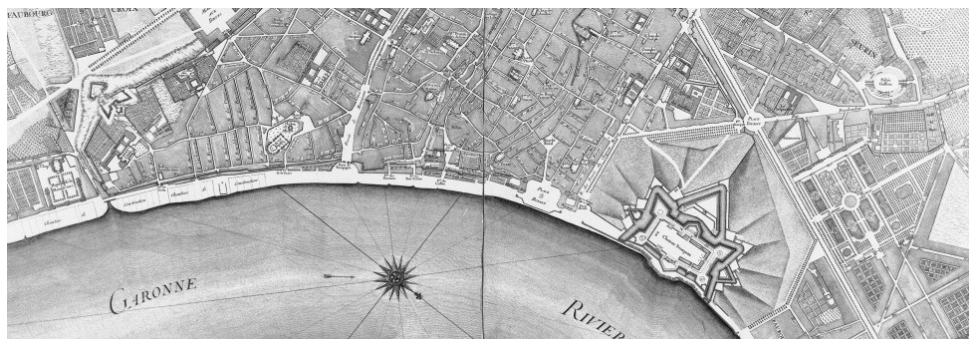
CULTURE

ボルドー王像広場はガロンヌ河に向かって広場の半分を開いた形をしている。18世紀当時は、税関と商業会議所と埠頭を備えた、いわば交易センターであり、プロジェクトが始まったのが1730年代、ヴェルサイユ主導の国家プロジェクトであり、建築家は王室主任のジャック・ガブリエルであった。プロジェクトは王像広場を発端に河岸に約500mに渡って庶民向けの集合住宅とその間の都市門の建設を含んでおり、全体がガブリエルとその息子による古典主義で彩られ建設された。旧市壁の外側に展開したその真新しい建築群は白い石を用いていたので、当時のボルドー市民から「白い都市」と呼ばれた。その長大なファサードは今日見ても圧巻である。

そのプロジェクトの筆頭出資者がプロテスタント商人らであった。フランスのプロテスタントの多くは1685年の「フォンテーヌブロー王令」によって法的な権利を剥奪され、一家離散の危機に面して、ある者たちは亡命し、ある者たちはフランスに留まり、その国際的ネットワークを使ってしぶとく生き残った。彼らにとっての「避難所」となっていたのがボルドーであり、多数のプロテスタントが周辺地域から集まった。その一人、ジャン・ペレの一家もルエルグからボルドーに避難したのち、18世紀に商家として躍進を遂げ、一代で財を築いた。ジャンはその過程で王室のプロジェクトに出資し、王像広場には自らの邸宅を構えたのである。

この出資者らの来歴と彼らの王室プロジェクトへの参画という経緯は、18世紀フランスにおけるプロテスタント復興運動と緩やかに符合する。西洋史において「荒野」と呼ばれるその復興運動は、18世紀前半の地下活動による再建運動を「第一荒野」、1760年代に始まる王室へ権利回復を求める請願活動は「第二荒野」と呼ばれ、それが1787年の王令、いわゆる「寛容令」を引き出す。ボルドーでも同様で、18世紀中葉まで地下の集会增加した。ボルドー市政体はそれを黙認し、対して都市の支配

## ボルドーの広場 La place de Bordeaux



階層はカトリックの色彩が強く、彼らは都市改造には伝統的に反対であった。そんななかヴェルサイユが派遣してきた官僚が商人らの手も借りて王像広場を建設する。ジャン・ペレが広場に自邸を建て始めたのが1747年、完成した4階建ての邸宅の窓からは勇ましい王像が広場の中心に見えたはずである。ジャンは自らの成功を噛み締めながら、一家と仲間たちの運命を揺さぶってきた王室の象徴をどんな面持ちで見下ろしただろうか。

これを直ちに宗教的「復興」ないし「寛容」の一側面であるとは言えないし、当時はそういった理念を追って建設されたのではなく、もっぱら実利的なものである。そもそもプロテスタントの有力者はたびたび王室に経済的な支援を行っていた。しかし、歴史のその時々、異なる社会の割り切れない実利を引き受け、一つの実態として都市に結びつける建築の貢献は記されていないだろうし、それこそ建築の本分であるように思われる。プロジェクトはプロテスタントの新興エリートをボルドーに空間的に結びつけたし、さらには社会的にも結びつける役割を果たしていたかもしれない。一方でまた、建築の成り立ちを宗教や移動の社会史から説くことは、今日、興味深いメッセージを放つように思われる。保護と排斥、寛容と不寛容といった言葉を超えて、建築は、都市の様々な差異や衝突、不足を再考し、転換するフィールドを提供するからである。そこには実り多き対話が隠されているように見え、そこにこそまだ語られていない建築の本領が多くあると考えている。(文責・角玲緒那)

Plan géométral de la ville de Bordeaux et de parties de ses Faubourgs Levé par les ordres de M. de Tourny, Intendant de la Généralité(1755)  
(gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France)

Spécial

Culture

Vie

Urbain

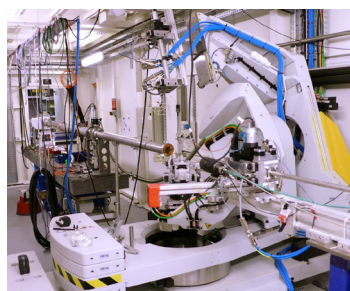
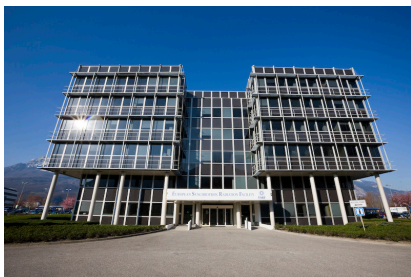
Cuisine

# グルノーブルでの留学生活

グルノーブル（Grenoble）はフランス南東部イゼール県の県庁所在地である。2016年現在、都市圏全体でおよそ16万人の人口を擁しており、フランス全体で第16位の都市である（ちなみに日本の第16位都市は新潟市）。パリからTGVで三時間余、最寄りの大都市リヨンからは自動車で1時間ほどの距離にある。アルプス山脈の西端に位置し、グルノーブル市自体も三方をシャルトリューズ、ベルダン、ヴェルコーの三つの山地に囲まれ、市内からでも美しいアルプスの山々を眺めることができる。市街地には石造りの古く美しい町並みが残る一方、路面電車網が整備され、電気自動車の貸出サービスが始まるなど積極的な近代化も試みられている。

グルノーブルは研究機関が数多く集まる、ヨーロッパ有数の研究都市である。古くから大学街として知られており、グルノーブル大学の創立は14世紀にまでさかのぼる。現在でも都市人口に締める学生の割合は2割にのぼり、またそのうちの1割程度は海外からの学生と国際色も豊かである。大学組織以外にも、国立科学研究センター（CNRS）系の研究機関や、欧州共同利用施設（後述のESRFなど）、また原子力・代替エネルギー庁（CEA）系の研究所など、多種多様な研究関連施設が林立している。

筆者らの所属する植物高分子研究所（CERMAV）はCNRSに属する研究機関で、1966年に繊維・製紙産業で用いられる植物由来の材料を研究する目的で創設された。[写真：CERMAV] 創設から50年たった現在では、研究の対象範囲は植物由来の高分子の化学、生物学、そして材料学と大きく広がりを見せており、各分野で第一線の研究が行われている。構成員は事務スタッフも含めて100名程度と比較的小規模であるが、和気あいあいとした雰囲気の研究所以である。CERMAV研究所は日本との関わりが大変に深く、日仏工業技術会の副会長である岩田教授を始め、過去20名以上の日本人研究者が滞在している。現在も、常勤研究者2名を含む5人の日本人研究者が精力的に研究を行っている。



左上：  
CERMAV  
右上：  
ESRF1  
(c)MOREL/ESRF  
左下：  
ESRF2  
(c)MOKYNEUX/ESRF  
右下：  
ESRF3  
(c)ESRF/D2AM

L'ECHANGE

生活

VIE

Spécial

Culture

Vie

Urban

Cuisine

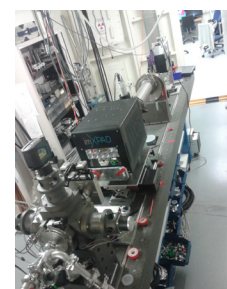
グルノーブル市の北西には欧州共同利用施設の欧州放射光施設 (ESRF) がある。[写真: ESRF1 ~ 2] 非常に大規模な研究施設であり、ドーナツ状の施設内には 50 以上の実験室 (ビームライン) が配置されている。ESRF では特殊な高エネルギーの電磁波を用いて物質の微細な構造を調べる実験を行うことができ、欧州全域、また世界中から研究者がここでの実験のためにグルノーブルを訪問する。筆者らも年に数日間程フランス所有のビームライン [写真: ESRF3 ~ 4] において実験を行っているが、施設内部は SF 映画に出てくる宇宙船のようで興味深い。また欧州共同利用施設であるため所内での公用語は英語であり、フランス国内にあっては少し特殊な施設である。

さて、グルノーブルは研究都市として以外にも、山岳、ウィンタースポーツが盛んな土地として名高い。1968 年には冬期オリンピックが開催されており、その記録映画である「白い恋人たち」も有名である。近隣の山岳地帯では夏はハイキングやキャニオニング、クライミング、また冬にはスキー、スノーボードと様々なアクティビティを楽しむことができる。特にスキーは年齢を問わず大変に人気であり、グルノーブルでは冬場の会話の大部分が天気と積雪量についての情報交換に費やされる。筆者もグルノーブルに移住してから山スキーを始めたが [写真: mountain]、肉体的には多少過酷なものの冬山の自然を満喫できる大変素晴らしいスポーツである。

食事については都会のお洒落なフランス料理とは趣の異なる、素朴な山岳地帯の郷土料理を楽しむことができる。[写真: tartar steak] ジャガイモとチーズが主体の料理が多く、特に有名なのはジャガイモのグラタン [写真: gratin]、チーズフォンデュなどである。また熱して溶かしたチーズをジャガイモやハム、野菜などに絡めて食べるラクレットは冬場の人気料理である。[写真: raclette] 調理は簡単で一般家庭でもよく食されているが、シンプルな調理法ゆえにチーズ本来の美味しさを十分に満喫することができる、一見ならぬ一食の価値ありの料理である。

本原稿執筆にあたり、写真提供にご協力くださいました欧州シンクロトロン放射光研究所 (ESRF)、Public Outreach Officer、Yannick Lacaze 氏、北海道大学大学院工学研究院助教、磯野拓也博士に心より感謝し、厚く御礼申し上げます。

(文責・小川悠、栗林朋子)



左上：  
mountain  
右上：  
tartar steak  
左下：  
gratin  
真ん中下：  
raclette  
右下：  
ESRF4  
(c)ESRF/D2AM

# パリの新型トラム

## Le nouveau tram de Paris

ヨーロッパの大都市でしばしば利用するのが、瀟洒なデザインの路面電車、いわゆる「トラム」である。我が国でも近年、LRT（Light Rail Transit）を活用した都市再生のあり方が注目を浴びており、鉄道ファンでなくともご存知の方が多いかもしれない。

さて、昨秋のパリ出張にて、筆者もトラムに乗る機会があった。パリ市の南の外れから南西に向かって延びる、トラム6号線（Ligne 6 du tramway d'Île-de-France）である。2014年12月に開通したばかりの同線は、6両編成と長く、現代的なデザインはまばゆいばかりだ。筆者は以前、東京下町の、とある都電電停前のマンションで3年ほど暮らしていたことがある。そのため「路面電車」と聞けば、近所のおばあさんたちを乗せた1両だけの電車が、自転車に追い越されるくらいの速さでゆるゆる走っていく情景を勝手に思い描いてしまうのだが、その牧歌的なイメージは良い意味で裏切られた。（…本当は、「トラム」「路面電車」「LRT」は、それぞれ指し示す範囲が微妙に異なるようなのだが、筆者は鉄道にそこまで詳しくないのでご容赦願いたい。）

始発のChâtillon-Montrouge駅から、筆者の目指すDivision Leclerc駅まで、かなりの急坂を力強く登っていく。それにしても、やけに静かだ。車輪がレールに擦れる金属音も、カーブに差し掛かったときの揺れも、ほとんど感じない。不思議に思って、トラムを降りてからよくよく観察してみると、あることに気づいた。どうやら、一般の電車のように鉄の車輪ではなく、ゴムタイヤのようなのだ。後で調べてみると、ゴムタイヤトラムはフランスが開発・実用化の中心地で、振動や騒音の抑制、急勾配や急カーブにも対応可能であるなど、既存の路面電車と比べて複数のメリットがあるとのこと。日本でも、大阪で実験線がつくられて技術的な検討は行われたが、実際の路線での採用例は今のところない模様である。

そんな最新鋭のトラムであるが、筆者が出張先で仕事を終えて帰るときには、何かのトラブルで運行が大幅に遅れていた。定時運行の点では、やはり日本の鉄道システムに勝るものはないのかもしれない。

（文責・菅原慎悦）



パリのトラム（筆者撮影）

パリ  
Paris

L'ECHANGE

都市

URBAIN

Le  
tram



# 布団のかたち

**フ**ランス・ブルゴーニュ地方にあるオータンという街に、ロマネスク建築で知られるサン・ラザール教会があります。その柱頭彫刻のひとつは、三人の東方博士に天使が指を触れて、ヘロデ王の元に帰らないように命じる場面を表しています。並んで横になる東方博士たちは一枚の布団にくるまっていますが、その形は半円状で、折り返してあることを考えるとこの布団は円形です。創建が12世紀に遡る教会の彫刻はいずれも、石の風化とあいまって、ときにユーモラスで表情豊かな形象がなおのこと魅力的ですが、とくに、ホットケーキか味噌せんべいのような、同心円状の模様が入ったこの布団が実に温かそうに、おいしそうにみえます。ぬくぬくとした眠りの感覚が喚起されるのに加え、布団が円いことよって、すなわち、熱量のある食べ物をイメージさせることで、視覚の温暖効果が生まれるように思われます。

**と**ころで、20世紀フランスの詩に布団を詠った作品があります。フランシス・ポンジュの「羽毛布団」です。こちらの布団は一般的なもので、「長方形の絹の袋に何百万もの羽根が含まれて」います。そして「少なくとも五十羽の鳥が身ぐるみ剥がされ、私はその下で、何ら悔悟の念なく横たわる」。生き物を犠牲にする罪の重みは、しかしながら、その後の「すべて白い羽根、あるいは色つきの羽根が彩りよく組み合わせさせて入っている透明な布団袋があったらよいのではないか」、その方が商売人の懐が温まる、という軽々しい提案で緩和されます。

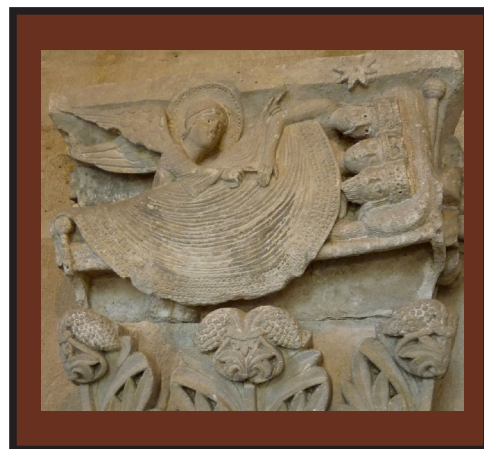
**実**はフランス語で「羽毛布団」を意味する語 (l'édredon) は重い響きをもち、布団のふかふかした軽さには結びつきません。語 (名前) と物の不一致は動かしがたい現実です。しかし重要なのは、重さと軽さのバランスを丁度よく保つことです。ポンジュが詩の中で繰り返し強調する羽の膨張力は、「羽根」(la plume) が作家の筆 (鷲ペン) を指すことから、過剰な文章、装飾的・感情的な言語表現の冗長さを暗示しています。そうすると、羽根の拡散を抑える四角い袋は、詩人が文字を書く紙を指します。紙という物質的な媒体は、舞い上がりがちな夢をとどめてくれる枠組みといえるでしょう。

**口**マネスクの柱頭彫刻が目に見えないものを見る形で表す (指の接触がお告げを表す) のに対し、ポンジュの詩は目の前の事物から、見えないもの、言葉について及び詩の創作についてまで思考をめぐらせます (「私が何かの本質を見極めたいとすれば、おそらくそれは、これほど上手く隠れているこれらの羽毛そのものだ」)。そして最後には、言葉では表しにくい「ぬくもり」の感覚を喚起します。「これが、羽毛布団が明らかにし漏出する熱とは別の—そもそもそれが熱の元となる—羽毛布団の知られざる重要な特質なのだ。すなわち、羽毛布団を見つめる者は、純粋な興味を何かに向けたことに対する報酬として温かさを受け取る。」日頃顧みられない事物に関心を寄せる、それがぬくもり、と羽毛布団は語りかけます。

重要な特質なのだ。すなわち、羽毛布団を見つめる者は、純粋な興味を何かに向けたことに対する報酬として温かさを受け取る。」日頃顧みられない事物に関心を寄せる、それがぬくもり、と羽毛布団は語りかけます。

**サ**ン・ラザール教会の石の布団はやはり、見たまま俗世のお菓子ではなく、聖なる想いがはばたくための羽を模して半円なのかもしれません。

(文責・綾部麻美)



# 編集 後記

L' Echange



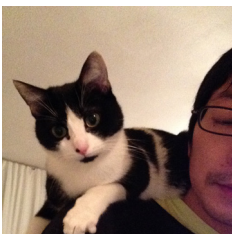
江口久美 九大・決断科学  
Kumi EGUCHI

やっと第五号が完成しました。今回は、九州大学で西洋建築史をご研究されている土居先生へのインタビューを敢行させていただきました。お忙しい中、お時間をいただき大変ありがとうございました。編集特派員も随時募集していますので、お気軽にご連絡ください。



角玲緒那 九大・芸工  
Reona SUMI

Je suis heureux que nous ayons pu collaborer ensemble, c'est un très grand honneur pour moi. メルシー！



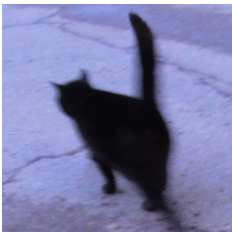
小川悠 フランス植物高分子研究所  
Yu OGAWA

Grenoble の紹介記事を書かせていただきました。3年間に渡ったフランス生活もこの4月で一区切りし、ドーバー海峡の向こう側に移住します。あちらは全く山がないので、あと数ヶ月でなるべくアルプスの山々を堪能しなくては、と思っています。



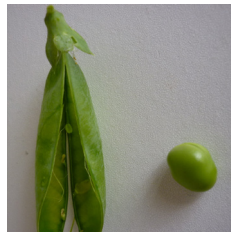
栗林朋子 東大院・農学生命科学研究科  
Tomoko KURIBAYASHI

この度、L' Echange に寄稿する機会を頂けて嬉しいです。本編にて紹介したグルノーブルは自然に囲まれた素敵な街です。特に山レジャーがお好きな方は、是非一度足を運ばれてみてはいかがでしょうか。



菅原慎悦 電力中央研究所  
Shinetsu SUGAWARA

遅ればせながら、シン・ゴジラを見ました（ネタバレ注意）。最後の最後でフランスがかなり大事な役割を果たすのですが、ここはアメリカでも中国でもなくて、フランスだからこそ占められるポジションなのだなあと感じた次第。



綾部麻美 慶應義塾大学・仏文学  
Mami AYABE

風化をうけたロマネスク彫刻には砂糖の塊を削ったかのような柔らかいざらつきがあり、造形の面白さに加えて目を和ませてくれます。柱頭を眺め続けると首は痛みますが、フランス旅行の楽しみのひとつです。

日仏工業技術会では新規会員を募集しています  
趣旨にご賛同くださる方であれば、学生・社会人等を問わず歓迎です。  
下記 HP の「正会員入会申込書」に、必要事項をご記入の上、本会事務局までお送りください。  
[http://www.sfjti.org/nyukai\\_set.html](http://www.sfjti.org/nyukai_set.html)

sfjti  
日仏工業技術会

日仏工業技術会は、創立者故菊池真一先生（東京大学名誉教授）が、1955年フランス大使館文化部（1969年独立して現在フランス大使館科学技術部）参事官（当時）C.d'Aumale 氏の要請を受け、当時経団連会長の石川一郎氏に初代会長就任を願い発足いたしました。往時の日本では、フランスの「文化の国芸術の国」としての側面のみが強調され、科学技術、特に工業技術についての情報は殆どない時代で、今日の現状と比べると今昔の感があります。本会はこのような状態を打破すべく、フランスの工業技術、その基礎となる工業技術研究、工業技術の高等教育制度、社会基盤など、工業の背景にある文化、社会を理解しながら、より広範囲の工業技術をわが国の産業界、研究者、学生などに紹介することを設立以来一貫して努めています。

【日仏工業技術会事務局】  
150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内  
Tel 03-5424-1146 Fax 03-5424-1147  
E-mail : sfjti@t3.rim.or.jp  
HP: <http://www.sfjti.org/>



【交通アクセス】  
JR 山手線：恵比寿駅東口下車 恵比寿ガーデンプレイス方面へ 徒歩 10分  
営団地下鉄・日比谷線：恵比寿駅1番出口 アトレ・JR 恵比寿駅東口を經由 徒歩 12分

## 日仏工業技術会への入会のご案内

日仏工業技術会は、駐日フランス大使館の協力を得て、日本とフランスの工業技術の紹介・普及、および両国の技術者の交流を促進することを目的として、1955年（昭和30年）に発足しました。両国と深い関係にある会社、研究所、内外の最新知識を求められる技術者、研究者、学生を会員とし、(公財)日仏会館傘下の学会の一つとして、様々な有益で最新の情報を会員の皆様に提供しています。

年二回配布する『日仏工業技術』は、日仏の工業技術に関する広範な知識を提供するだけでなく、「海からの贈り物」、「未来のプラスチック」、「iの時代、cの文化—情報通信に未来を探る—」、「色」、「からだの材料」、「原子力が繋ぐ日本とフランス」、「災害と国土」、「日仏の女性研究者たち」、「駅舎と高速鉄道」など、様々な切り口での特集を組み、底流に流れる文化の差異なども併せて紹介しています。昨年からは、若手研究者によるフリーペーパー『L'Echange』も発行し、旬なフランスの情報も提供しています。

また毎年、在日フランス商工会議所の会員とともに、金沢文庫、曹洞宗大本山総持寺、鶴岡八幡宮、江戸東京たてもの園などの日本の文化に触れながら、味の素(株)、三菱重工業(株)、(株)資生堂鎌倉工場&研究所、(独)日本原子力研究開発機構・東海村「J-PARCセンター」、住友電工(株)横浜製作所、(財)鉄道総合技術研究所などの日本の誇る先端技術を見学しています。

さらに、日仏フォーラムとして、『日仏都市会議』、『日仏鉄道技術シンポジウム』、『日仏情報通信フォーラム』、『日仏環境会議2008—都市生活と環境—』、『日仏原子力フォーラム—過去・現在・未来—』、『日仏水フォーラム』を開催し、日仏、日欧の情報の懸け橋となって活動を展開しています。

皆様に是非、ご入会いただき、ご一緒に活動できますよう、よろしく願い申し上げます。

日仏工業技術会会長 高橋 裕



写真左よりシンポジウムの風景、資生堂研究所見学の際の集合写真、会誌の表紙例

入会申込書

入会申込日： 年 月 日

貴会の趣旨に賛同し、正会員または学生会員として入会を申し込みます。

会員種別	正会員 (5 千円/年) 学生会員 (2 千円/年) (○で囲んでください) (いずれも入会金は無)
氏名	ふりがな： 漢字表記： 印 英語表記：
生年月日	西暦 年 月 日生
勤務先・在学先 (部署・学科まで)	
勤務先住所	〒  TEL: FAX: E-mail:
自宅住所	〒  TEL: FAX: E-mail:
会誌送付先	勤務先・在学先 自宅 (○で囲んでください)
学歴	大学 学部 学科 年卒業・見込 大学 研究科 専攻 修士課程 年修了・在籍中 博士課程 年修了・在籍中
専門	
通信欄	

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 日仏工業技術会  
TEL : 03-5424-1146 FAX : 03-5424-1147 e-mail:sfjti@t3.rim.or.jp  
振込先：みずほ銀行 恵比寿支店恵比寿ガーデン出張所 普通 1349506  
三井住友銀行 神田支店 普通 0321637